

アドルノの「経済と社会」*

—— 1950 年代のゼミ記録から ——

表 弘一郎

目次

はじめに

1. アドルノのゼミ記録と批判理論の生成
2. 1950 年代のアドルノ
3. アドルノの「経済と社会」—— 1957/58 冬学期 社会学主ゼミ「経済と社会 1」の分析
4. その後のアドルノ —— ゼミはアドルノ思想に影響を与えたか

おわりに

資料：1950 年代後半のアドルノの授業担当と著書

参考文献

キーワード：批判理論, 「経済と社会」, 交換, 新自由主義批判, 「生き延びること」

はじめに

Th.W. アドルノ (1903-69) の遺稿集刊行後の一次資料として, 近年, ゼミ記録が D. ブラウンシュタインによってまとめられた (Braunstein (hrsg.) (2021), 以下 FSA と略記)。一文を寄せた A. ホネットは, 次のような疑念が抱かれるのではないかと懸念を示している。「アドルノの膨大な遺稿から 12 巻の講義録がすでに優れた版でゾーアカンフから出版された後で, それに加えてさらに 2000 頁を超えるゼミ記録を公刊する意味は, 実際のところあるのだろうか」(Honneth (2021) V), と。だがゼミ記録からは, 学生たちをはじめとする参加者との相互作用のなかで語り思考する哲学者の生きた姿が浮かび上がる可能性がある。それは, 彼の教育実践の側面でもある。講義や講演ではなく, ゼミでこそ生まれうる論点や争点があるだろう。また, 著書や論文, 講義, 講演などには見られない思想内容が垣間見られる可能性もある。

本論文は, 哲学と社会学のゼミを同時に担当したアドルノの思考の特異性を, とりわけ著書にはまとめられていない「経済と社会」というテーマで議論がされた 1950 年代のゼミ記録に見ていく。なぜなら, 1960 年代に展開されることになる社会の概念や広く社会理論の生成の端緒を,

* 本誌の匿名のレフェリーの方々からいただいた貴重なご批判とご助言に深謝いたします。

参加者との相互作用のなかに垣間見ることができる可能性があるからである。さらには、ヴェーバーでもパーソンズでもない、アドルノの「経済と社会」という問題圏の独自性をも検討したい。言わば、知られざるアドルノの「経済と社会」を明らかにするのが本論文の目的である。

まず第1節ではアドルノのゼミ記録の概要と意義を批判理論の生成史の観点から簡単に見て、第2節では1950年代のアドルノの問題関心に簡潔に触れる。第3節では「経済と社会1」ゼミの分析を行ない、第4節ではこのゼミが——「経済と社会」ゼミの前半という限定的な素材を元にした試みに留まるが——その後のアドルノ思想にどのような影響を与えたのかを描出する。

1. アドルノのゼミ記録と批判理論の生成

アドルノのゼミ記録は、1949/50冬学期から没年までのものが残されている⁽¹⁾。彼がフランクフルト大学で教鞭を取りはじめた1931/32冬学期から1933夏学期（予告のみ）までの記録は少なくともFSAには収録されていない。1932夏学期に行なわれたベンヤミン『ドイツ悲劇の根源』をめぐるゼミ記録は残されている（Adorno（1992））が、それ以外は不明である。ゼミ記録の概要については、その一部ではあるが、表（2024）の資料を参照されたい。

1-1. ゼミの特徴

ゼミのテーマは多岐にわたるが、哲学と社会学のゼミを同時に開講していたことがその特徴のひとつである。アドルノが社会学担当として講義を行なったのは「音楽社会学」（1961/62冬学期）と「社会学序説」（1968夏学期）のみであり、他の講義はすべて哲学の担当として行なっている。ホルクハイマーの代講で行なった「社会の理論」講義（1949/50冬学期）も同様であり、「哲学と社会学」講義（1960夏学期）と「哲学的社会理論のエレメント」（1964夏学期）も同様である。

1950年代後半の著書との関係で見れば、1956年出版の『不協和音』と『認識論のメタクリティーク』、『ヘーゲル哲学の諸局面』（1957）、『文学ノート1』（1958）、『響の型』（1959）は、哲学主ゼミでは強く関係しているものもあるものの（『認識論のメタクリティーク』（GS5）が1957/58冬学期と1958夏学期の哲学主ゼミで取り上げられている）、社会学主ゼミではそのような関係性は見られない。むしろ、社会学主ゼミで議論されたテーマのうち、著書や論文としてまとめられていないものが存在する。1957/58冬学期から1958夏学期にかけて1年度議論された「経済と社会」もそのひとつである。

ゼミでは毎回記録が取られ、次回ゼミの冒頭でその記録が読み上げられ、議論が引き継がれていた（Braunstein（2021）4）。ゼミ記録を取っていた学生には、後に研究者となる者も数多くいた。例えば、初期にはH. シュヴェッペンホイザー（Hermann Schweppenhäuser）ら、60年代

には R. ヴィガースハウス (Rolf Wiggershaus) らである。また、1965/66 冬学期の哲学主ゼミ「ヘーゲルにおける否定」には、後に学生闘争時にその名が知られる H-J. クラール (Hans-Jürgen Krah) も記録者として出席している (1966.2.3)⁽²⁾。

また、報告者はその大半が学位取得直前の学生だったと考えられるが⁽³⁾、なかには、H. シュネーデルバッハ (Herbert Schnädelbach) や H. ライヒェルト (Helmut Reichelt)、H-G. バックハウス (Hans-Georg Backhaus) (1965/66 冬学期 社会学主ゼミ「社会の概念をめぐる」) などがいた。ライヒェルトやバックハウスらは“Neue Marx-Lektür”へ至る潮流を形成したが、アドルノが彼らに与えた影響のひとつが「交換」であったことはよく知られている。

さらに、出席者には、J. ハーバーマスの他、O. ネークト、A. シュミットなどもいた。参加者は 1950 年代半ばで約 60 名 (シュミットの回想、(Braunstein (2021) 7 から重引) と相当の規模だった。実際、1963/64 冬学期から、社会学ゼミは参加者多数のためか講義室で行なわれている (Bobka und Braunstein (2015) 16)。

編者のブラウシュタインはゼミ記録をこのように評価している。「たとえば、聴き手に向けて自らの教えを教育的に展開しているアドルノの講義とは異なり、ゼミ記録が示しているのは、批判理論がどれほど深く - しかも特別なあり方で - 『進行中の仕事 (work in progress)』として構想されているのか、ということである。その際、批判理論にとって生命とも言えるエレメントは、時代と結びついていること、同時代診断としての批判 - もちろん自己批判も - 、さらに議論に開かれていること (Diskursivität) だった」(Braunstein (2021) 6)。アドルノの講義が「教育的 (didaktisch)」と言われる原因は、彼が自らの思想をきわめて明快に - 時に具体例を挙げつつ非常に平たく - 解説している箇所が多く見られる点にあるかもしれない。そうした講義類と比較すれば、ゼミ記録の最大の特徴は編者の言う同時代性と自己批判、「議論に開かれていること」なのだろう。とはいえ、この点の描出は Braunstein (2021) では具体的に示されていないため、記録に即して具体的に描き出されねばならない。

さらに編者は、「ゼミ記録がこれまで公開されてこなかったアドルノの著作と取り違えられてはならない」(Braunstein (2021) 9) と注意を促している。ゼミ記録はあくまで記録者の学生たちが作成したものであり、アドルノが「本当に」考えたり言ったりしたことなのか、間接的な情報がない (ebd.)⁽⁴⁾。当然のことながら、記録が取られていたゼミの内容がすべてアドルノの思考そのものという訳ではない。編者がまとめている通り、「つまるところ、記録の内容は、アドルノの哲学や社会学ではなく、アドルノが参加者と共同で行なったゼミなのである」(Braunstein (2021) 10)。

また、編者はこう示唆している。「作品史の観点からより興味深いのは、アドルノの著作がゼミにどのような影響を与えたか、という問いよりも、ゼミがアドルノの著作にどのような影響を与えたか、というものであるように思える」(ebd.)。この指摘が妥当であるならば、討議の場

こそ生まれた論点や相互作用が生み出した論点も存在するかもしれない。こうした論点はどの程度存在するのだろうか。Braunstein (2021) もこの点を具体的に描出していない。したがって、アドルノと参加者たちとの共同性と相互作用、さらには討議の描出、これが本論文のもうひとつの目的である。

1-2. 先行研究

このゼミを取り上げた先行研究としては、管見の限り Demirović (1999) と Braunstein (2011) がある。Demirović (1999) は戦後ドイツの知的再建史を叙述するなかでアドルノのゼミ記録の一部を取り上げているが⁽⁵⁾、叙述の一部に使用しているに留まる。その「フランクフルト学派の教育実践」の章で、社会理論の継承を念頭に置いて非体制順応的な後継者たちを育てるというフランクフルト学派の教育関心と実践を描出しているが、ゼミ記録を用いる意図を次のように説明している。「アドルノ / ホルクハイマーと学生たちの間に、…対話のネットワークが作られていく様を示すことが、ホルクハイマー、そしてとりわけアドルノの社会学の授業についての以下の叙述の目標である。…以下でアドルノの発言を引用するのは、彼の理論について新資料を提出しようとしてというよりも、むしろアドルノが学生たちにどう理解されていたかを感じ取ってもらうためである」(Demirović (1999) S.439, 226 頁)。Demirović (1999) は本論文で分析する「経済と社会 1」ゼミも取り上げているが、新自由主義批判や近代経済学批判には言及していない。特に前者については、新自由主義をテーマとしたゼミ記録の存在に言及してはいるが、その内容を詳細に検討していない (Demirović (1999) S.460, 249 頁)。

Braunstein (2011) はアドルノの政治経済学批判を主要テーマとしたものである。ただ、Braunstein (2011) の段階では、アドルノやホルクハイマーらの討議、とりわけ参加者たちとの討議や共同性を再現し検討しているわけではない。

アドルノのゼミ記録は、フランクフルトにおける批判理論の生成の局面を、一時的にはなく、係争と論争に事欠かなかった戦後西ドイツの 20 年間に渡って明瞭に跡づけている。第 3 節では、上記の共同性や相互作用、「議論に開かれていること」の描出に注意を払いながら、ゼミ記録の分析を進める。

2. 1950 年代のアドルノ

1950 年代後半は、アドルノにとってフランクフルト大学で 1954/55 冬学期から初めて社会学演習を担当し、大学という制度において哲学と社会学、さらには音楽という異なる領域を同時に交差させる仕事を始めた時期でもあった。詳しくは、本論文末尾の「資料：1950 年代後半のアドルノの授業担当と著書」を参照されたい。大学内でも、1953 年に哲学と社会学の員外教授に

なった後⁽⁶⁾、1957年に正教授になり、1958年には社会研究所所長就任（Braunstein（2021））と、ホルクハイマーに代わって職責が増した時期である。しかしながら、ゼミ記録を詳細に見れば、大学内外のそうした事情ないし背景よりもいっそう切実でアクチュアルな問題意識が明確に見取れる。「社会学の脱経済化（Entökonomisierung）」（FSA2, S.51）がそれである。（西）ドイツ社会学の現状への顧慮と心理学との弁別という二つの問題意識がこの表現に濃縮されている。この問題意識に基づいて、ゼミでの議論は「経済と社会」という問題圏、さらには経済へと向かったのである。

ところで、若干注意すべきことに、当時フランクフルト大学には「2つの社会学」が存在した。一方で哲学部には「哲学と社会学」、他方で経済・社会科学部（Wirtschafts- und Sozialwissenschaftliche Fakultät）には社会学の講座があった⁽⁷⁾。アドルノが担当していたのは前者である。哲学部の「哲学と社会学」は、よく知られている通り、ホルクハイマーの要請にしたがって第2次大戦後に社会哲学の講座から改編されたものである⁽⁸⁾。哲学と社会学の間の独特の関係性にアドルノが鋭敏であったことは、「哲学と社会学」講義に明確に表れている。この関係性のなかで社会概念の彫琢と社会理論の構築が進められたことは疑いないだろう。

アドルノの社会理論は、その独自性と射程をめぐって議論が蓄積されているが、交換を結節点として理論構築が進められたのもこの時期と見てよいだろう。交換をめぐっては1920年代からさまざまな言及が見られるが、とりわけこの時期に議論が深められたと考えられる。この点もゼミ記録の精査によって検証する。

さて、「経済と社会」という問題圏は、アドルノ思想においていつ頃登場したのだろうか。このゼミのテーマが「経済と社会」になったのは、Demirović（1999）によれば、M. テシュナー（Manfred Teschner）の説得である。テシュナーはこのテーマで一度授業を行なうようアドルノを説得しなければならなかったとインタビュー（1998.12.7）で回想している（Demirović（1999）S.460, 331頁）⁽⁹⁾。Braunstein（2011）は、このインタビューに参照を促しながらシラバスへの影響も根拠にしている（Braunstein（2011）S.270）。

ただ、「経済と社会」という問題圏はこのゼミで初めて立ち現れたわけではなく、講演「今日の人間的な社会」（1957.10.16）にも見られるのだ（これについては表（2024）を参照）。テシュナーの回想で講演に言及されていたかは不明だが、内容の連続性と時期から判断すれば、アドルノの問題関心は同講演から引き継がれていると見てよいのではないか。同講演およびゼミにおいてその後1年間持続することになるアドルノの「経済と社会」への関心が、先行研究ではやや低く見積もられているのではないだろうか。この点も含めて次節で議論する。

3. アドルノの「経済と社会」——1957/58 冬学期 社会学主ゼミ「経済と社会 1」の分析

それでは、1957/58 冬学期 社会学主ゼミ「経済と社会 1（以下、WG1 と略記）」の議論を分析する。

3-1. ゼミの構成と記録法

資料の構成、すなわち WG1 の全体は以下の通りである。各回には、便宜上筆者がタイトルを付けている。ゼミでは基本的に毎回報告者がおり、その報告に基づいて討論が行なわれた。

第1回 ゼミテーマの提示

第2, 3回 報告者プラント「マルクスの政治経済学の諸問題」

第4回 交換をめぐる討論、報告者テシュナー「現代の帝国主義のマルクス主義理論」

第5回 テシュナー「現代の帝国主義のマルクス主義理論」

第6回 テシュナー「現代の帝国主義のマルクス主義理論」終了、アドルノの社会の理論、討論

第7回 報告者ローレンツ「エンゲルスの『反デューリング論』における経済と社会」

報告者モール「経済と社会；新自由主義の寄与」

第8, 9回 報告者フェッヒャー「国民経済学の主観主義的価値理論の諸問題」

上記のゼミの議論の展開は、マルクス主義理論の受容と批判、新自由主義の紹介と批判、近代経済学批判の3つに大別できるだろう。

アドルノはこのゼミの準備を相当入念に行なったようである。ホルクハイマー宛ての手紙(1957.11.18)で、彼は開講直後のゼミ（と講義）について次のように記している。

「今学期はまったく順調に始まりました。2つの主ゼミの出だしはとても素晴らしく、社会学主ゼミは今回は最も細部に至るまで準備をしたので、議論の道筋（Marschroute）はきわめて堅実です。哲学主ゼミは『〔認識論の〕メタクリティーク』をめぐるものですので、それほど準備は必要ありません」（AHB 4, S.470, [] は引用者の補足）。

したがって、社会学ゼミの構成はアドルノ自身が緻密に組み上げたものと理解してよいと考えられる。「経済と社会」というゼミ・テーマがテシュナーの説得によるものだとしても、アドルノは決して受動的にそのテーマで進めたのではなく、むしろ近代経済学の議論まで射程に入れてゼ

ミの計画を練り上げたと解釈できる。

ゼミ記録の質や方法について、まず注意すべきは、記録の質が一定ではない点である。議論の筋道を丁寧に記録している記録者もいれば、概要に留めている記録者もある。これは、記録者が毎回同じではないこと（同じ学生が複数の記録を残している場合もある）、さらにはアドルノ自身のチェックを経ていないことを踏まえれば当然ではあるだろう（アドルノのチェックという点で第2回は例外だが、これについては3-4で詳述する）。

この学期のゼミ記録法はさまざまである。どの箇所がアドルノの発言なのか判然としないものもあれば、アドルノの発言と出席者の発言を明示しているものもあり、さらにはゼミ記録の最後のパートで「討論」と題してゼミ討論を再現したものもある（第6回）。この点を踏まえて、以下ゼミの内容を概観する。

3-2. ゼミテーマの提示（第1回）

このゼミの問題意識は明快である。初回（1957.11.12, 記録者 Klaus Horn）の冒頭で、アドルノはゼミの取り組みを描き出している。「経済と社会」というテーマの問題圏は尋常ではなく複雑だとされている。ゼミの意図は次の点にあるとされる。すなわち、全体性としての社会をめぐって省察を進め、経済学と狭い意味での社会学との関係について省察を深めることである（FSA2, S.49）。ゼミの主な問いは次である。すなわち、「経済と社会の諸々の関係は社会過程の『決定的な力』なのか、あるいは経済的なものに依存しない諸々の合法則性は存在するのか、という問いである」（FSA2, S.50）。

初回ゼミの末尾でアドルノは次のように語っている（この箇所は直説法）。

「…私たちの主要な課題は、経済学と社会学の分裂を超えて政治－経済理論の様々な礎石を運び集め、それとともに社会学の脱経済化によってこの理論が偽装された心理学に他ならないものになってしまうことを阻止することにある」（FSA2, S.51）。

すなわち、「社会学の脱経済化」は社会学と心理学との明確な区別を消失させかねないものであり、経済的なもの、あるいは経済と社会の関係の再考によって社会学の再生へ至る可能性が生じるというのである。実際、この直前に参加者とアドルノの間で次のようなやりとりがある。

「社会学の批判的再生が私たちの歩むべき道となりうるかという問いに対して、アドルノ先生は、結論としてもう一度〔それは〕根本的〔な事柄〕だと答えた」（ebd.）。

したがって、冒頭で語られた「全体性としての社会をめぐって省察を進め、経済学と狭い意味で

の社会学との関係について省察を深める」(FSA2, S.49) ことが、この理論の構築の礎石のひとつとなりうるのである。これが「理論のある種の臆病さ」(FSA2, S.50) を乗り越える方途なのかもしれないが、ただ政治－経済理論そのものの構築が意図されていた訳ではない点には留意する必要がある。

なお、興味深いことに、初回のゼミ記録からすでに討論の記録が存在し (FSA2, S.51), そこでも少なくとも2回交わされた討論によって、ゼミの方向性とアドルノの狙いがきわめて明確になっている。特に、「社会は演繹された経済に他ならないという見解が最初から代弁されていないのではないか」というJ. モリター (Jacob Molitor) の疑念は、アドルノ思想にとっては外的なものと考えられるため、ゼミという場がアドルノにとっても刺激溢れる開かれた省察の場であったことが想起される。それこそアドルノがゼミを「探究心溢れる性格」(ebd.) と形容した所以だろう。こうしたやりとりにより、先述の共同性や相互作用、「議論に開かれていること」を看取してよいと思われる。実際、彼の次の発言は「議論に開かれていること」の証左だろう。

「彼は、これから報告される諸々のテーマによって全く異なる見解も語られるため、こうした問題提起がゼミの取り組み全体にとって妨げになりうるとは思わない [と述べた]。」(ebd.)

3-3. マルクス主義理論の受容と批判 (第2～5回)

第2回

第2回ゼミ (1957.11.26, 記録者 Hilmar Tillack) の冒頭では、「マルクスの政治経済学の諸問題」をめぐる G. ブラント (Gerhard Brandt)⁽¹⁰⁾ の研究報告第2部とともに、以下の複数の経済学に言及されている。

古典的な国民経済学 (Nationalökonomie) (スミス, リカード, ミルなど)

「資本主義における社会の内的な運動法則」をすでに見つけていたとされる古典派
マルクスの理論が結びついていたとされる偉大な政治経済学

内容から判断して、この箇所の「国民経済学」は、その後いわゆる近代経済学として発展したものである。「古典派」は、「政治経済学」と同一と解していいだろう。「国民経済学は、古典派が－自発的にはないにしても－すでに見つけていたもの、すなわち資本主義における社会の内的な運動法則を逸している」(FSA2, S.52) と言われている。

この第2回では、マルクスの議論、すなわち社会的有用労働や資本主義における交換、剰余価値の概念、さらには利潤率の傾向的低下や蓄積に関して議論がなされた (FSA2, S.52-55)。いず

れもマルクス経済学から見て特に目新しいものではないが、ただ若干興味深い点がある。討論において、「労働者はなぜ剰余価値を作り出さねばならないのか、という問いかけ」がなされたのだが、この箇所はアドルノによって次のように手書きで補われている。「作り出すのか、したがって受け取る以上のものを与えなければならないのか、という問いかけ」(FSA2, S.54)。第3回ゼミでは、剰余価値理論が出発点とのアドルノの発言があるが(FSA2, S.62)、この手書きの補充は資本主義システムの根本に存する剰余価値の創出と交換とを関連させた考察の反映のように読める。すなわち、等価交換からの逸脱と労働者の搾取こそが資本主義システムの維持に寄与し、社会の不断の拡大、すなわち没落を招いている、というように。

なお、「経済と社会 1・2」を通じて、この回のみゼミ記録にアドルノ自身が書き込んだ箇所が5箇所存在する(FSA2, S.53, 55)⁽¹¹⁾。いずれもゼミテーマにとって決定的と思われる箇所だが、上記のほかに重要な箇所が2箇所存在する。そのうち1箇所はアドルノの社会理論にとって決定的と思われる、もう1箇所はマルクスに対するアドルノの立場が鮮明になっている箇所である。以下に詳しく見てみよう。

「剰余価値が価値増殖過程に存する場合にのみ、システムが維持されうる。これがこの社会におけるまさに悲劇的な契機であり、この契機とともに社会が生命を維持し、拡大しなければならない。そうすることによって、社会は固有の没落へと歩みを進めることになる。ここに私たちは、資本主義における経済と社会の最も内的な関係を見出す。ゾンバルトもヴェーバーもこの点を繰り返し強調している。資本主義社会の動態は封建制の静態と対照をなしている」(FSA2, S.55, 下線は引用者)。

第一の下線部は、アドルノによって手書きでこのように補われている。「これがこの社会理論におけるまさに悲劇的な契機である。すなわち、社会が生命を維持するには、自己自身を拡大しなければならない」(ルビがアドルノによる加筆箇所)。この表現には、のちのアドルノ社会理論に頻出する表現、すなわち社会が自己自身を維持するには自己を拡大しなければならないという認識とはほぼ等しいものが見られる。

第二の下線部にもアドルノによる手書きの補充がある。「ここに私たちは、資本主義における経済と社会の最も内的な関係を見出す」(ルビは同様)。すなわち、ゼミテーマの「経済と社会」に関して、以上の把握はあくまでもマルクスの議論であって、アドルノ(たち)の把握はそれとは異なるという認識が明確に見て取れる箇所である。

第3回

第3回ゼミ(1957.12.3, 記録者 Ellen Schölch)は、前回に続き、マルクス主義の文献に見ら

れる危機の由来をめぐる2つの理論（利潤率の傾向的低下と実現問題（Realisationsproblem））の報告がプラントによって行なわれた（FSA2, S.56）。

報告者の結論は次のようなものだった。「重要なのは、経済と社会の関係を含意している、生産過程の二重の性格を理解することだとされる。生産過程は一方では技術的な側面を持ち、他方では歴史的・社会的な様々な条件を持つ価値増殖と搾取の過程と結びついているとされる」（FSA2, S.59）。

前回に引き続き議論されている剰余価値理論は、経済と社会の無差別点（Indifferenzpunkt）として、経済的にも社会的にも理解することができるとされる（FSA2, S.60）。

このゼミの討論は、剰余価値理論に集中したとのことである（FSA2, S.61）。記録を見る限り、かなり活発な討論が行なわれた印象で、参加者とアドルノの間で繰り広げられた忌憚のないやりとりも見られる。たとえば、投資の減価償却をめぐる純粋に計算上の諸問題をめぐって H. ムンツ（Horst Munz）から質問があったが、アドルノは「マルクスは様々な抽象化の水準で自己の理論を展開したため、質問は該当しないのではないかと報告者に異議を唱え（ebd.）、さらに自説を展開して、「はるかに重要なのは、マルクス主義の固有の思考モデルは、剰余価値理論を出発点と捉えることである」（FSA2, S.62）と強調している。

第4回

第4回のゼミ（1957.12.10、記録者 Rudolf Billerbeck）は討論が中心となっており、とりわけゼミの前半で、交換と抽象に関する重要な議論が頻出する（FSA2, S.64-66）。

O-E. ラスケ（Otto-Ernst Laske）が「ある商品の交換価値を規定する際、いかなる形態の具体的な有用労働も問題にしないのならば、きわめて現実的な帰結を招きうる、そうした広範囲の抽象は意味があるのか、という問いが成り立つ」と指摘し、「そうした抽象を正当化する、現実の社会的所与が存在しなければならない」と述べた（FSA2, S.65）。これに対してプラントが、「使用価値は比較的固定した諸関係のもとで交換されているため、現実の所与は世界に存在する」と答えた（ebd.）。

この二人のやりとりに対して、アドルノは「現実の交換行為においてすでに存在する事柄をマルクスは追体験しているだけだ」と（意外にもあっさりと）補い、直後に次のように述べている。

「交換そのものを通じて、抽象の契機が現実（Realität）に入り込む」（ebd.）。

この回のゼミでは一文しか記録されていないが、交換をめぐるアドルノの把握にとって、この箇所は決定的である。A. ゴーン＝レーテルからの影響もあると思われるが、まったく異質なも

の交換を成立させるためには、抽象という思考と行為が不可欠である。抽象において思考と行為が結合している。直前の「普遍的な分母」としての貨幣を持ち出すプラント（と思われる）回答よりも一歩踏み込んだ議論である。

ラスケがさらに、「実際には明らかに等価ではないのに、等価ではないものを交換しなければならないのか」(ebd.)と問うたのに対して、アドルノはこう答えている。

「…マルクスの体系は政治経済学の批判でもあるため、自由主義的国民経済学の批判にもなっていると答えた。自由主義思想にもとづく社会が想定されているならば、等価なものを交換しており、したがってマルクスは次のように問うている。等価ではないものが交換されるのはいかなる根拠にもとづいてなのか」(ebd.)。

自由主義の社会ならば、等価交換が成立しているはずである。だが、現実には不等価交換は至るところに観察されるだろう。マルクス自身も問うた不等価交換の現実的成立の根拠は、上記のラスケの「現実の社会的所与」以外にも、「使用価値の抽象」にも求められている（FSA2, S.65-66）。だが、この使用価値の抽象としての交換価値という議論がはたして十分な回答たりえているのか、定かではない。交換をめぐる議論はここで終わっている。

ゼミの後半ではテシュナーの「現代の帝国主義のマルクス主義理論」の報告がなされた（FSA2, S.66-72）。テシュナー報告の概要が紹介され（ドップ、ヒルファーディング、スウィージーなどが取り上げられているとのこと）、「マルクス主義的帝国主義理論は、後期段階における資本主義の理論だという要求を掲げ、政治経済学を後継するもの」だと言われている（FSA2, S.66）。

社会の動態的な性格はすでにヘーゲルやスペンサーと合致しているとのアドルノの介入を補いながら、テシュナーは「現代の経済理論は確かに動態をも知っているが、マルクスだけが必然的に過去になるものを指し示しているように思われる」と指摘している（ebd.）。テシュナーは、マルクス主義ではない社会学と国民経済学に特徴的なことは、とりわけ過去の社会・経済秩序を単に歴史的なものとみなすが、こうした批判的開始を資本主義には適用しない点だと指摘したが（FSA2, S.66-67）、ここでアドルノが述べて次のように指摘している。

「これは歴史の考察方法における恣意的な停止ではなく、むしろ自由主義の理論と、『私たちは他とは違うものなのだ』という信念と関係がある。自由主義の理論は、合理性の要請を代表し、計算によって合理的に実行された支配を可能にするものである。非合理的なものが合理的統制のもとにあったとしても、理性が維持されうる。これは決定的である。というのも、何よりも理性を代表する全主体（Gesamtsubjekt）が存在せず、敵対的な階級社会のみが存在することをマルクスが描き出していたからである」（FSA2, S.67）。

ここには、自由主義をイデオロギーと断じ、合理的支配と関連させるアドルノの把握が見られる。

続いて述べられる、マルクスのシステム認識をめぐるアドルノの把握は興味深い。

「アドルノ教授は、マルクスにおいては、経済の内部における一時的なバランスの成立が一種の役割を果たしていると強調した。だがマルクスは、システムを自己の内部に攪乱要因を抱えた統一 (eine in sich gestörte Einheit) としてではなく、本質的に敵対的なものとして認識した。マルクスにおいて、社会は矛盾によってのみ成立しているのである」(FSA2, S.68)。

のちの社会概念において、アドルノは社会を敵対的なものとして捉えているが、その発想の根本がマルクスにあることがよくわかる箇所である。

この後、テシュナーは、「敵対関係は諸々の危機において明らかになる」と述べ、「諸々の危機は、いわゆるメメント・モリとして最終的に崩壊へ向かうのではないか」と問うている (ebd.)。この後、さらに崩壊理論をめぐる議論は続き、途中でハーバーマスの鋭い解釈展開も見られ (ebd.)、H. グロスマンの「資本主義システムの蓄積と崩壊の法則」(FSA2, S.69) も取り上げられ、カウツキーやローザ・ルクセンブルクも登場するが (FSA2, S.70-71)、議論は割愛する。ただ、テシュナー報告からと思われる次の表現は興味深い。

「世界戦争とファシズム、10月革命は、崩壊理論を新たに定式化するきっかけを社会主義の理論家たちに与えた。…。これ〔より長期の解消プロセス〕が、たとえば原子力戦争に至ったり、いまある諸条件によって解消され、諸々の課題を引き受けうる新たな階級の発生に至るかどうかは、何よりも社会の自己意識、すなわち社会の理論にかかっている」(FSA2, S.72)。

最終文に見られる社会理論のきわめて実践的な捉え方がゼミでどのように議論されたか、記録は残っていない。アドルノのコメントを知りたいところだが、第4回の記録はここで終わっている。

ちなみに、この回はアドルノと報告者とのかけ合いが面白い。ゼミでは、アドルノが報告者の議論を補ったり、口を挟んだり、遮ったりする様子が活写されている (FSA2, S.65-67)。単に横槍を入れるだけではなく、アドルノの介入によって議論がさらに展開しており、アドルノの思想、この場合は自由主義に対する立場が浮き彫りになるシーンもある (FSA2, S.66-67)。

第5回

第5回のゼミ（1957.12.17、記録者 Horst Helmut Kaiser）記録は、討論箇所はあるものの、前回までのような再現はなされていない。また、編注にもある通り、判読し難い箇所があるとのことである（FSA2, S.74）。前回に続き、テシュナーの報告が行なわれた。帝国主義の拡張と独占などが議論され、剰余価値を作り出す生産手段が利潤率の低下傾向に対抗的に作用するプロセスが母国の労働市場にもたらす効果をめぐり、労働力商品の優遇という帰結を挙げる参加者に対して、アドルノが個々の労働主体の職場にとって常により過剰になりうる完全雇用の問題圏を指摘する（FSA2, S.73-74）など、興味深いシーンはあったものの、全体として討論が際立つような記録にはなっていない。

ただ、ゼミの最後で、シュルスキー批判が見られた点は興味深い。「労働者が『新たな中間層』へと移行する、という主張に対して反論があった」とのことである（FSA2, S.76）。

3-4. アドルノの社会の理論（第6回）

第6回のゼミ（1958.1.7、記録者 Otto-Ernst Laske）記録は、前半でテシュナーの報告が終了し、後半からそれを契機に「社会の理論のいくつかのテーマ」についてアドルノが論じ始める（FSA2, S.78-81）。この箇所をめぐっていくつかの解釈が存在するため、詳細に検討する。この語りの冒頭で、アドルノは次のように述べている。

「経済と社会のいずれが優位かという問題からはじめて、アドルノ先生は、現実に批判的な理論（wirklich kritische Theorie）の課題はこうした問いを解きほぐすことにあると述べた。これらのいずれか一方の優位ではなく、その統一性を明らかにすることが有意義だとされた。

政治経済学の概念そのものは、…交換経済と社会過程との統一性を意味する⁽¹²⁾。

そうして、その統一性という枠組みのなかで、社会の生命過程は、本質的なものとしてのその全体性（Ganzheit）において、交換自体を通じて、媒介されたありようで、〔あるいは〕その反対に他の何らかの所与、たとえば人間学的あるいは生物学的なありようで、その妥当性を失うように見える」（FSA2, S.79）。

経済と社会というゼミテーマに対して、ここでアドルノは総括的な言説を展開している。興味深いことに、以上の議論の枠組みとして、「社会学の批判的再生」から「批判的社会学」、そしてここでは「現実に批判的な理論」というように、表現の変遷が見られる。すなわち、第1回では社会学にとっての課題としてアドルノが語っていたものが、第6回に至って批判的な理論というように、表現の変化ないし外延の拡大が見られるのである。これは、「経済と社会」というテーマ

への取り組みには、社会学という枠組みではなく、批判理論というより広い枠組みが不可欠との認識の現れではないだろうか。この批判理論において、経済と社会の優位をめぐる問いは解きほぐされる。なるほど、経済の社会への依存関係、あるいは逆に社会の経済への依存関係というように、ひとつの要因ないし依存関係のみを確定させるのは、事柄に即せば適切ではない。そうではなく、「交換経済と社会過程との統一性」が肝要であって、これを把握するのが政治経済学という訳である。上記引用の後半では、社会の生命過程を交換すなわち媒介へと帰する議論が見られる。この点は次の発言でも確認できる。

「社会についてのマルクス主義理論において決定的なのは、経済への社会の依存をめぐる抽象的な諸々のテーゼではない。むしろ、社会関係が簡単な商品諸関係からどのように生じるのかを指摘するという課題を掲げたのである。この過程にとって構成的とみなされるのが交換原則である」(FSA2, S.79-80)。

次に問題になるのが、経済と呼称される領域のすべてを交換原則に還元ないし帰因できるのか、という問題である。

「経済の実体化は徹底的に問題含みのものとされる。『経済』を展開された交換経済の意味でのみ捉えうるかぎり、いずれにせよ問題になるのは、支配の諸関係を経済的な諸要素に還元する理論が、交換以前の諸関係 (Vortauschverhältnisse) へとどの程度応用可能か、というものだ」とされる」(FSA2, S.80)。

交換以前の諸関係（そうしたものが想起されるとして）と経済はいかなる関係にあると捉えられたのか。その解はおそらく第8回のゼミ記録に見られるだろう。

「マルクス主義理論の到達点は、この理論を恒常的に駆り立てる社会の発展法則を、傾向にしたがって、経済から導出することである。冷酷な連関が駆り立てる洞察は次のようなものである。すなわち、持続している資本主義的社会秩序の転覆の可能性以外には、〔人類が〕生き延びる可能性は実際に存在しない、というものである。こうした〔連関の〕強制をもとに変革の願望を打ち立てることは、安易に過ぎると言われる」(ebd.)。

資本主義的社会秩序の転覆というアドルノにしては直接的とも思える表現が見られるが、ただ、変革の願望には慎重な留保を付している。転覆の可能性はあくまで可能性であって、どこかの革命のように安直に実現できるものではない。だが、資本主義的社会秩序の転覆の可能性なしに

は、人類が生き延びる可能性は存在しないという。資源の最適配分に照準する経済学からは、さらにはマルクスの議論からも導出できないだろう、「生き延びる」という論点をアドルノはここで提示している。

最後には、ヘーゲルに言寄せつつ希望が語られる。

「私たちは労働する主体であり、しかしながら私たちが作るものによって、自ずから作り出される様々な社会的必然性の網の目のもとで、私たち自身を客体へと疎外するという事実、理念に次のような内容を与える。すなわち、〔客体へと疎外された私たち自身が〕ふたたび主体になることはやはり私たちにかかっているに違いない、という内容である」(FSA2, S.81)。

資本主義的社会秩序において私たちは労働する主体であり、その限りで不断に疎外されているが、にもかかわらず主体へと回帰できるかは私たちにかかっているというのである。こうした主体への希望が明確に語られているのも 1950 年代のアドルノの思考の特徴だろう。ただ、疎外のもとでもなお主体の何に希望が抱かれているのか、その能力なのか潜勢力なのかはこの時点では明確にされていない。

討論

以上を受けて討論が行なわれている。WG1 では、唯一「討論」と題された箇所である (FSA2, S.81-85)。討論では参加者 8 名が発言し、アドルノとの間で活発な議論が繰り広げられた。なかには、参加者同士で議論が展開され、そこにアドルノが加わるシーンもあった。テシュナー報告の理解をめぐるデーマー (Dörmer oder Doemer)⁽¹³⁾ の告白から議論が始まり、ブランドの応答とデーマーの簡単なコメントがあり、そこにアドルノが加わって自説を展開し、ムンツが応酬する場面である (FSA2, S.84-85)。ムンツはこの回で唯一 2 回発言しているが、ここで彼は「欲望は様々であるため、生産は〔そうした欲望を〕完全に満足させることは決してできない」と述べ、それに対してアドルノは「意味のある欲望ならば『自然な』限界を定めることができる」と反論し、討論は終わっている (FSA2, S.85)。この討論の際、アドルノはムンツのテーゼをあまりにもラディカルとみなしているが (ebd.)、資本主義の性質の捉え方からすれば、欲望の「自然的限界」とはアドルノらしくはない発言である。

この討論には複数の論点が含まれているが、そのひとつが「天国のような状態」と「生き延びる」という論点である。アドルノはもちろん「天国のような状態」を肯定はしない。ムンツの問いかけに対して、アドルノはこう答える。

「社会の発展は天国のような状態…にその始まりがあると想定することはもちろんロマン主義的であり、結局のところ〔主体の〕『客体への疎外 (Entfremdung zum Objekt)』をふたたびその脱出口へと戻してしまうことになるのだ」(FSA2, S.82)。

彼は「人間の成熟 (Mündigwerden) が意味しうるのは、天国のような状態など存在しなかった前史が終わりを迎えることだけだ」(ebd.) と述べる。このように、アドルノは一度は「天国のような状態」という素朴な表象を否定するのだが、その直後に H.H. エーアハルト (Hans Heinrich Ehrhardt) が言葉を継いでこの論点を展開させる。彼は、「天国のような状態を再建するというユートピア的表象は、生き延びることという、人間の正当な利害関心に帰することができる」(FSA2, S.83) と言う。

興味深いことに、アドルノは先程の自らの立場をすぐに撤回するのではなく、エーアハルトに反論するのではなく、その議論の展開を引き取って、すぐさま次のように述べている。

「〔それは〕疑いない、とアドルノ教授は述べた。今日、社会主義はユートピア理論とともに擁護されるものではもはやありえず、ただ、生き延びる (überleben) ことという人間の要請とともに擁護されうるものだ、と。このモチーフがマルクスに欠けている事実が誰の目にも明らかのように示しているのは、様々な敵対関係がそれ以来どれほど劇的なあり方で先鋭化したか、ということである」(ebd.)。

この展開で少なくとも次の2点が注目されるべきである。1つは「生き延びること」を契機としたマルクス批判であり、もう1つは討論に見られる議論の展開法である。前者は、敵対関係の先鋭化を前提としており、言ってみればマルクスが描出した状態を越えるような階級対立の先鋭化によって、もはや「生き延びること」と社会の再生産が選択可能な状態ではありえないというアドルノの現状認識があるのだろう。後者に表れているのは、討論のなかで提起された論点を尊重するアドルノの姿勢だろうし、それこそアドルノのゼミが「議論に開かれていること」の証左だろう。

前者の論点をもう少し掘り下げよう。上記の議論の直後でアドルノはこのように述べている。「社会の正しい構成 (gerechte Einrichtung) は人類の生存 (Überleben) にとって唯一の可能性」(ebd.) である、と。「生き延びること」という要請を満たすには社会主義が必要なのであり、この場合の社会主義とは、ユートピア的な社会主義ではなく、通俗的に理解される政治体制としての社会主義でもなく、「社会の正しい構成」なのである（もちろん、いかなる意味で「正しい」のかが次に問われねばならない）。

3-5. 新自由主義の紹介と批判（第7回）

第7回のゼミ（1958.2.4, 記録者 Hans Carle）では、前半でエンゲルスの『反デューリング論』における経済と社会の関係をめぐる R. ローレンツ（Richard Lorenz）⁽¹⁴⁾ の報告と討論が行なわれ（FSA2, S.86-88）、後半では新自由主義をめぐる E.T. モール（Ernst Theodor Mohl）⁽¹⁵⁾ の報告と討論が行なわれた（FSA2, S.88-90）。

前半の討論の冒頭で、アドルノは「支配か経済かいずれが根源的なものかという問題提起のうちにすでに、存在するものの全てを最初に存在していたものから解き明かすことができるのだという、19世紀の迷妄がわずかに存在している」（FSA2, S.86）と注意を促す。一種の根源への憧憬と厳密さを欠く演繹（ebd.）をアドルノは鋭く批判する。「誤認された第一のものの背後には、常になお別のものが見出されうる」（FSA2, S.86-87）とアドルノは言う。こうしたアドルノの立場には、「哲学のアクチュアリティー」に見られたような仮象批判が存するだろうし、より根本的には、何らかの第一のものを指定して議論を進めようとする基礎づけ主義への懐疑があるだろう。経済と社会の関係をめぐる問いは、エンゲルスのように、「観念論的」で「存在論的」に定式化されるべきではないとされる（FSA2, S.87）。「むしろ重要なのは、経済と社会の関わりを具体的な歴史的時代において、とりわけ現在において、分析することだ」（ebd.）とされる。

こうしたアドルノの言説のなかでも重要なのは、次の一文だろう。「交換社会においては、経済が封建制度のシステムにおいてよりもはるかに大きな重要性を持つ」（ebd.）。この認識は第6回の議論を引き継いでいるだろうし、第8回での交換をめぐる議論とも比較検討すべきだろう。

この後、アドルノとローレンツの間で若干の討論があり、ローレンツはエンゲルスの主張を個別の論点で過度に真剣に受け止めることに対して警告し、「エンゲルスの著作はマルクスの説を擁護するものであり、とりわけ労働者階級のために、したがって皆にわかるように書かれている」と述べた（ebd.）。これに対してアドルノは、「政治経済学の批判、すなわち剰余価値をめぐる支配的な理論への批判が展開されていたのだ」と述べた。「エンゲルスは経済が優位な社会を批判したのだ」と彼は言う（ebd.）。

この回にはハーバーマスも参加していた。彼はエンゲルスの手紙⁽¹⁶⁾への参照を促して、「支配と経済のいずれが優位かという問いへの関心が明白だ」と述べた（ebd.）。この箇所のハーバーマスの発言は、アドルノの主張を補強する格好になっているだろう。

さらに、プラントは興味深い議論を代弁している。「経済の優位という問題はエンゲルスにとって戦略的な意味を持って」おり、それというのも「資本主義的生産様式 - それとともに経済の優位 - の克服によって、支配の克服を望んでいたからだ」（ebd.）という議論である。ところが、プラントは J. パーナムの「経営者革命」を例に挙げて、「経済の優位の仮定とともに、マルクスの理論も疑念を抱かれている」と述べ（ebd.）、具体的にロシアを例示している（「経済の

優位の克服にもかかわらず、いまだなお支配が存在している」(FSA2, S.88)。

以上の討論の最後で、アドルノは次の点に注意を促している。

「マルクスの天才的な点は、なるほど彼は歴史を自然史の前進として把握しているが、ダーウィニズムを世界観にまで高める、まさにこの状態を攻撃しているところにある。政治経済学に対するマルクスの批判は、生産諸関係の他律的な支配の批判にあるとされる。人間は、そうした諸関係から解放されるべきなのだ」(ebd.)。

問題は、エンゲルスが主張したような経済の優位でもなく、支配の優位でもない。人間が必然的に絡め取られ編み込まれている生産諸関係の他律的な支配からいかに自己を解放し、生産諸関係を自律的に編み直すかが問題なのである。

後半では新自由主義をめぐる議論が展開されているが、そもそもなぜ新自由主義が取り上げられたのか、報告テーマの選定理由について少なくともゼミ記録からは明らかにならない。とはいえ、つまるところ個人と社会との関係を考察する一助として新自由主義が議論の対象となったことは、次のアドルノの発言に容易に看取できる。「新自由主義は、個人が、そこで生きている社会の諸々の形態によって規定されていることを認識していないとされる」(FSA2, S.89)。1950年代後半にアドルノが新自由主義をめぐる見解を述べていた事実は、従来ほとんど知られていなかったと思われる。したがって、ゼミ記録のこの箇所は新自由主義をめぐるアドルノの見解を知れる点でも興味深く、「フランクフルト学派」と新自由主義との邂逅と対決という点でも興味深い。

より詳細に見ていこう。モールの報告テーマは「経済と社会をめぐる新自由主義的な構想」だった(FSA2, S.88)⁽¹⁷⁾。アドルノは「強い意味での自由主義者 v. ハイエクと v. ミーゼスを – 同じくリール (Wilhelm Heinrich Riehl) も – 新自由主義の『学派』に数え入れることへのためらい」があると言う (ebd.)。これに対してモールは、「たとえばハイエクとリュストゥとの論争に明らかなように、こうした〔新自由主義という〕学派はきわめて非同質的なグループを表している」と回答している (ebd.)。確かにハイエクとミーゼスはともにオーストリア学派として一括されるが、ミーゼスをも新自由主義者と見なすのは些か無理がある。こうした応答の背後には、ハイエクとミーゼスの思想 (とその差異) をアドルノが知悉していた事実が想起される。

G. バーナード・ショーの自由主義の定義を引き合いに出して、アドルノは「個人の自発性の相互作用が社会の再生産を保証している」という発想をその中核に見出している (ebd.)。

細かな論点はさておき、モール報告に討論が続いた。そこでアドルノが分け入るのは、やはり「新自由主義の理論における経済と社会の関係をめぐる問い」である (FSA2, S.89)。アドルノの見立ては以下である。

「この理論 – 特にオイケンによって代表されるような形態の理論 – は、個人を抽象的に捉えて実体化するとされる。新自由主義は、個人が、そこで生きている社会の諸々の形態によって規定されていることを認識していないとされる。人間があたかも自由であるかのように、計画された社会的機構（Veranstaltungen）によってのみ脅かされるかのように振る舞うとされる」（FSA2, S.89-90）。

新自由主義の議論は、社会による個人の被規定性を看過しており、したがって「経済と社会の本来の問題は逸する」と言われる（FSA2, S.90）。

アドルノの主張では、「…諸個人の自由は、オイケンの把握とは反対に、またマルクス主義理論とも異なり、内在的な社会的諸傾向によって常により小さな規模に還元される」のである（ebd.）。興味深いことに、ここでアドルノは、新自由主義理論（オイケン）もマルクス主義理論もともに批判の対象にしている。

批判的な理論を批判対象に原因を求めて拒絶する態度を、アドルノはオイケンに見出している。

「オイケンのように、批判的なものを表現する理論を、批判の対象となる苦境のせいにして拒否するという事態は、市民社会の啓蒙期以来繰り返し生じている」（ebd.）。

こうした批判の手法は、たとえば実証主義論争など後のアドルノにも見られるものだろう。こうしたアドルノの主張をモールは補って、「新自由主義たちにとって、今日脅かされている自律的な人格性という概念は根本的な意義を有しており、彼らにとって理論の出発点となっている」と言う（ebd.）。

個人が問題となれば、次に問題となるのは当然のことながら社会である。続いてレンク（Lenk）⁽¹⁸⁾ は、「新自由主義の社会概念はヘーゲルとマルクスが用いた社会概念と同一ではなく、むしろ民族（Volk）や共同体と特徴づけられる」と述べている（ebd.）。最後にアドルノが、「その際重要なのは、組織論的な（organizistisch）社会概念」だと自らの見解を提示している（ebd.）。この箇所の組織論的な社会概念はその含意がやや汲み取り難く、議論の展開が不十分かと考えられる（同時期の Institut für Sozialforschung（1956）を参照）。

現代でも、新自由主義は競争原理と不可分に結びついている。リュストウは、「諸個人にとって諸力の自由な働きから生じる様々な機会は異なっている」と捉えるが、アドルノは鋭く、「競争原理が幸運な者だけに良い機会を与えるとすれば、リュストウはこの原理をどのように支持しうるのか」（ebd.）と問いかける。

それに対してモールはこのように述べる。

「新自由主義たちの見解によれば、諸力の自由な働きは国民総生産の最大化に至るのだが、ただしそれは様々な摩擦なしにことが進む場合だというのである。それゆえ、ここで社会政策が緩和政策（Linderungspolitik）として介入しなければならないとされる」（ebd.）。

ここで介入という概念が登場するが、アドルノはすぐさま、「新自由主義たちは - 一部の者はきわめて明確に - 経済領域の様々な介入になぜ反対するのか」と問いかける（ebd.）。モールは「そうした反論は市場に反する（marktkonträr）介入に当てはまる」と答える（ebd.）。「市場に同調する介入 - たとえば価格メカニズムを損なうことのないような介入 - が拒否されることはない」と言う（ebd.）。

その後ハーバーマスが「新自由主義者たちは社会学ではなく人間学の方へ向かっている」と詳論した（ebd.）。彼が言うには、「彼らの表象に実在していたのは人間存在の自律的領域であり、その独立性が維持されなければならないとされる。したがって、提唱された様々な介入によって、経済的なものだけがふたたび経済という場において人間の実存の範囲へと動かされるべきだとされる」（ebd.）。こうしたハーバーマスの議論を補うモールの発言が興味深い。モールは「まさにここに存するのがキリスト教社会主義（Soziallehre）との交差結合（Querverbindungen）だ」と述べ、「人間学 - ヒューマニズム - 経済という三角形に基づく新自由主義理論は、こうした3つの領域の諸々の要請と矛盾しないような諸介入だけを許容する」と示唆した（ebd.）。この箇所でもキリスト教社会主義で想起されているのが具体的にどの思想なのか、記録からは判然としない。ただ、たとえば仮に G.D.H. コールのような存在だとすれば、確かに交差結合という表現が適切だろう。

以上の議論に対して、アドルノは「だがこれは、経済外的なコントロールメカニズムを経済のなかに偽装して受け入れる結果になる」と述べて討論を終えている（ebd.）。すなわち、新自由主義理論は、一見人間の自由と自律を最重要視しているように見えるが、そこに人間学ないしヒューマニズムが「交差結合」することによって、経済外的なコントロールメカニズム（介入メカニズムとは言わないまでも）を意図せずに経済の領域に移入しているという訳である。アドルノのこの総括は、その当時の新自由主義の理解がどの程度の確かは精査される必要があるだろうが、新自由主義の内側からその陥穽を明らかにする批判と言えるだろう。

3-6. 近代経済学批判（第 8, 9 回）

第 8 回

第 8 回のゼミ（1958.2.11, 記録者 Wilke Thomssen）では、国民経済学の主観主義的価値理論をめぐる H. フェッヒャー（Hans Fecher）が報告を行なった⁽¹⁹⁾。第 8・9 回のゼミはここまでのゼミとは趣を異にし、近代経済学（現代経済学ではなく）の諸問題を検討している。

フェッヒャーの報告によれば、主観主義的価値理論は人間の様々な欲望や願望から出発し、財の価値は個人の効用評価（Nutzenschätzungen）によって測られる。すなわち、メンガーが表現したように、価値は具体的な諸々の財の「意味」を表しており、欲望の充足を考慮すると、人間はそうした意味に依存していることを自覚するのである（FSA2, S.91）。これに対して、客観主義的価値論は経済の全プロセスの客観的諸要素、すなわち生産諸関係と生産諸力に基づいている。財の価値は社会的に必要な労働時間によって規定される（FSA2, S.91-92）。価値をめぐるこうした2つの立場の矛盾は、「社会が客観的な諸要素、様々な費用の要素をともなう生産領域に依拠しているのか、それとも諸個人の欲望と効用評価に依拠しているのか、という争い」になる（FSA2, S.92）。

主観主義的価値論に対する反論は次のようなものだった。「社会的強制やバンドワゴン効果などのような要素を最初から取り入れずに…、自律的で個人的な欲望を最後の所与のように扱い、理論の出発点にするのは非常に問題含みなのではないか」（ebd.），という反論である。

確かに近代経済学（なかでもミクロ経済学）の出発点は経済主体の欲求（効用）である。これに関して、フェッヒャー報告では次のように述べられた。「ここで、主観主義的価値理論が示しているのは、その実証主義的な思考の出発点である。個人主義はまさに、人間を個別化へと駆り立てる、展開された交換社会の諸傾向と合致している」（ebd.）。引用の第2文がフェッヒャー自身の発言なのか、ゼミの誰かの発言なのか、やや判然としない。だが、主観主義的価値理論に交換社会の傾向を看取するこうした解釈は、アドルノのゼミの傾向であったのだろう。

この回では、価値の概念をめぐる、とりわけ本来希少な財の評価の問題をめぐる比較的長い議論が交わされた（FSA2, S.93）。議論の最後に、次のような興味深い表現が見られる。

「おそらく、客観主義的価値論と主観主義的価値論は、変容を媒介として相互に移行する。一方の理論において解明できない矛盾は、他方の理論においても解決できない。なぜなら、現実には統一的な性格を有していないからだ。現実とはそれ自体が敵対的である。複雑な諸現象を統一的な原理に還元しようとするいかなる試みも、失敗に終わるに違いない」（FSA2, S.94）。

ここでは、近代経済学に対してだけでなく、マルクス経済学に対しても批判的な眼差しが向けられている。敵対的な現実という表現はアドルノが多用するものであるため、以上の概括はおそらくアドルノによるものと考えられる。

ところで、討論中に登場する次の表現には注意が払われるべきだろう。

「希少な財とその価値はそれ自体が経済にとって外的なもの（etwas ökonomisch Fremdes

an sich)であり、そもそも交換にとって外的なもの (tauschfremd) である」(ebd.)。

この発言が誰のものかは不明である。ただ、この箇所に見取できる経済の表象は明らかに再生産であり、オイコノミア (家政) に近いだろう。こうした論点が希少性という近代経済学の根幹に関わる議論中に登場している点は非常に興味深い。

第9回

第9回のゼミ (1958.2.25, 記録者 Ursula Deininger) では、やや概括的な議論が見られる。冒頭で、「ゼミの全体テーマ『経済と社会』との関係で、フェッヒャー氏の報告は国民経済学の主観主義的価値理論にとってどのような諸問題が立てられるのか、という問いに答えた」と述べられている (FSA2, S.95)。フェッヒャーによれば、「国民経済学にとっての関心事は、価格形成のメカニズムを一般的な定式にもたすこと」だという (ebd.)。ベルヌーイとゴッセンに主観主義的効用理論のはじまりを見た後、フェッヒャーは基数的効用から序数的効用へと議論を進める (FSA2, S.95-97)。その途上で、投げかけられた批判に対してフェッヒャーはこう答えている。「重要なのは、数学的なフィクションないし抽象的な心理学的モデルの数学化である。いずれにせよ、現実の社会を突き動かす諸々の衝動の力の真の記録は、問題ではない」(FSA2, S.96)。

最後の討論は、経済学と社会学の形式上の対象をめぐるものになった。

「とりわけ、費用分析の代わりに、なぜそもそも欲望をめぐる問題に向かうのか、という異議に対しては、価格や市場といった諸概念が媒介されているという事実が注意が促された。数学的な定置の一種の恣意をめぐる懸念が示された。社会学の固有の諸問題は、メタ-経済学的に現象するとされた！ 社会的な前提を問う研究は現れていない」(FSA2, S.97)。

以上の断片的な討論の記録には、近代経済学に近い立場からの違和感や数学化に対する懸念、社会学の固有性、経済学の社会的な前提を問う研究の不在、などが垣間見える。

その後、アドルノによる定式化が記録されている。

「経済学理論の目的は正確な市場法則にあつて、供給と需要の数学的な計量可能性にある。だが、市場はすでに模写されたもの (etwas Abgebildetes) である！ したがって、経済学理論は構成問題を放棄している。だが、システム内在的な出来事を定式にもたすことが最終的に重要になりうるのではなく、より深い問題は、経済現象の位置価を社会のなかで確定することである」(ebd.)。

ここには経済学に対するアドルノの違和感が看取できる。アドルノの立場は明らかに客観主義的価値論に近いだろう。そこからすれば、数学的な計量可能性を重視する近代経済学における市場は、確かに「すでに模写されたもの」である。ただ、よく言われるように近代経済学における市場法則は一次近似に過ぎないため、アドルノの違和感は近代経済学の立場を（おそらく意図せずに）的確に言い当てているだろう。

ゼミ記録の最後は、ハーバーマスの総括コメントである。

「〔討論のまとめとして〕総括的に、ハーバーマス博士は認識目標の多様性を示唆した。主観的理論ははっきりとした実証主義を含んでいる。その目標は目前の諸現象における機能的な価値導出である！ それに対して、客観的理論は－マルクスにおいても－まさに形而上学である。なぜなら、それは価値の根源と本質について問うているからである。そこにいっそう容易に見て取れるのは、－心理学を度外視すれば－社会技術的な介入である。ここで、客観的理論を実践に移行しようとする際に、新たな、『別の』諸問題が現れる（ebd.）。

アドルノと同様、ハーバーマスはマルクスをも批判の対象としている。最終文は簡潔に記録されているが、理論と実践という別の問題圏の示唆で終わっている。議論がさらに継続していたならば、アドルノとの立場の相違が明確になっていたかもしれない。

4. その後のアドルノ ― ゼミはアドルノ思想に影響を与えたか

以上、1957/58 冬学期 社会学主ゼミ「経済と社会 1」の議論を詳細に分析した。このゼミは、その後のアドルノ思想にどのような影響を与えたのだろうか。おそらくこの点が、Braunstein (2021) の言う作品史の観点からもっとも問われる点だろう。まず、編者の言う同時代性と自己批判と「議論に開かれていること」の観察を具体的に描出し、その上で、アドルノ思想に与えたであろうゼミの影響を描出する。

4-1. 同時代性と（自己）批判、「議論への開かれ」の描出

まず同時代性について。「経済の奇跡（Wirtschaftswunder）」のただなかで開講されたこのゼミには、アドルノらがどの程度意識的であったか定かではないが、新自由主義やマルクス主義などの検討を通じて、「時代との結びつき」が明確に見られる。特に、新自由主義と経済への介入をめぐるアドルノの（素朴とも言える）疑義は、エアハルトの経済相在任期間（1949-63）を支えたオイケンらオールド自由主義の発想と鋭い対照を成しているのではないだろうか。

前節冒頭で概観したように、ゼミでの議論が社会から個人へと（あるいは社会における個人の

被規定性から個人の自発性へと）その焦点を移行させつつ、検討が進められたことがわかる。したがって、その途上で新自由主義が議論の対象になった点も理解困難ではないだろう。新自由主義の理解が彼ら自身（たとえばハイエク）の思想に即して正確か否かはさておくとして、1950年代末という従来の想定以上に早い時期にアドルノが新自由主義思想を議論の対象としていた点は、フランクフルト学派の生成過程において改めて省みられるべき事実だろう。ハーバーマスがこのゼミに参加していたことも、彼のその後の新自由主義批判を考えると非常に興味深い。彼が折々に繰り広げる新自由主義批判（近年では『資本主義かデモクラシーか』など）のルーツのひとつとして、このゼミ記録を捉えることもできるだろう。

さらに（自己）批判について。自己批判の契機は、場合によると最も見出し難いものかもしれない。ただ、討論の進め方をよく観察すれば、アドルノが学生の見解を積極的に取り入れて、ゼミでの議論の展開に活かしていることがわかる（たとえば「生き延びる」という論点をめぐる議論の展開など）。

最後に、「議論に開かれていること」について。この点は、第1回や第4回、第6回の記録など随所に見られる。アドルノは時に学生に鋭い問いを投げかけ、学生からも真摯な問いが忌憚なく投げかけられている。

以上のように、同時代性と自己批判と「議論に開かれていること」は、ある程度観察される。これは、批判理論の真理性の所在を確認する作業でもあった。批判理論をどのように理解するにせよ（フランクフルトに係留された批判理論、あるいは大陸を問わず展開している批判理論云々）、その真理性のひとつが討議可能性であることは多言を要しない。アドルノのゼミ記録にもそうした討議可能性や（ハーバーマスの言うような）可謬性を明確に看取できるのである。

4-2. 「生き延びる」ための経済（学）批判

次に、ラフ・スケッチに留まるが、アドルノ思想へのゼミの影響を何点か列挙する。この点は、Braunstein (2021) も具体的には行なっておらず、本論文でのゼミ記録の詳細な分析を通じて初めて明らかにしえたことである。

第一に、ゼミの報告と討論のなかで、アドルノは想像以上にマルクス経済学や近代経済学の知見に接している。アドルノは、ゼミでの報告に対するコメントと討論のなかで自己の社会理論を展開している。すでに指摘した通り、「社会学の批判的再生」から「批判的社会学」、さらには「現実に批判的な理論」というように外延が拡大し、「経済と社会」を分析の対象とする社会理論がゼミのなかで生まれつつある印象を抱かせる。より端的に述べれば、社会学から社会理論へとアドルノの関心が転回し形を成していく場のひとつがゼミだったのではないか、という推測が成り立つように思われる。

第二に、経済表象に議論が照準し、交換や生産、価格、費用等々について議論が交わされるな

かで、希少性に相対するように再生産の概念が登場している (FSA2, S.94)。オイコノミアに近いこうした表象は、さらに交換概念との関係のなかで検討される必要があるだろう。もっとも、第9回ゼミに見られる通り、アドルノの関心は、経済学理論ではなく、「経済現象の位置価値を社会のなかで確定すること」にあっただろうが。ミクロ経済学の議論まで参照していたという点で、WG1には見るべきものがある。引き続き1958夏学期 社会学主ゼミ「経済と社会2 (以下、WG2と略記)」を分析する必要があるだろう。

第三に、ゼミの議論によって社会概念の彫琢がさらに進んだ可能性もある。アドルノの社会概念は1954年の草稿「社会」に始まり、1956年の『社会学的補遺』第2章「社会」で最初の姿を見せ、1965年の事典項目「社会」(GS8)に至ったが、その途上でWG1の議論が影響を与えた可能性も考えられる(社会概念の形成過程については表(2024)を参照)⁽²⁰⁾。第9回ゼミにて、アドルノは「市場はすでに模写されたものである」(FSA2, S.97)とコメントしていた。これは、『社会学的補遺』第2章「社会」における次の表現を想起させる。

「…経済学は現在の状態で発展した交換社会の模写 (Abguß) – それはすでに、交換社会として受け入れられたメカニズムとともに対象化されたものである – とかかわっている」
(Institut für Sozialforschung (1956) S.32, 30 頁)。

1954年の草稿「社会」にもかなり近い表現が見られるが (Adorno (2003) S.147), 「模写」という言葉は存在しない。1956年の時点で見られた「交換社会の模写」という経済学の捉え方が、1958年初頭で「模写されたものとしての市場」というように変容した過程、ないしはミクロ経済学の議論に接してより厳密になった過程をこのゼミ記録は垣間見せる (ただ、「模写」という言葉をどの時点から用いているかは別に調査の必要がある)。こうした経済学の把握は1965年の「社会」には見出せない。その消失の地点をさらに見定める必要があるだろう。

最後に、先述した討議の場でこそ生まれた論点や、相互作用が生み出した論点は存在したのだろうか。その典型は、「討論」の記録が残されている第6回ゼミだろう。「生き延びること」というモチーフをめぐる議論の展開とそこで析出されるマルクス批判と理念には、アドルノと参加者たちとの共同性と相互作用が明確に見て取れる。人類の生存にとって唯一の可能性としての「社会の正しい構成」(FSA2, S.83)という議論は、資源の最適配分を規範とする現代経済学ではなく、社会的再生産、あるいは社会の再生産、すなわち現在の社会の再生産ではなく、人類の生存という目的に即せば既存のありようではない別様の社会をまなざす立場であり、経済学とマルクス双方の批判へ向かっている。こうした、「生き延びる」ための経済(学)批判は「経済と社会1」ゼミを通じてこそ見える論点であろうし、現在に生きるアドルノである。

おわりに

以上、WG1 を詳細に検討したが、ゼミの影響の描出は上記に留まる。ここから先は、WG2 を分析する必要がある。経済と社会との関係がある程度明らかにされたとすれば、次には社会とは何か、経済とは何かが問われることになるだろう。実際、前者については社会概念の彫琢というかたちで探究が進められた。後者については、ケインズも議論の対象となる WG2 で焦点が当てられることになる。経済とは何か、現代の社会経済学における「社会」概念が、その主たるテーマであった。経済と社会との関係を探究した WG1 と、経済とは何かを考究した WG2 によって、議論は一種の円環を描くことになるのかもしれない。だが、WG2 の詳細な分析は別稿の課題である。

資料：1950 年代後半のアドルノの授業担当と著書⁽²¹⁾

1956 夏学期

哲学講義「純粹現象学の叙述と批判」

哲学主ゼミ「フィヒテの学問論（ホルクハイマーと共同）」

社会学実習「社会構造の諸問題をめぐって（H. プロスと共同）」

社会学主ゼミ「デュルケム（テキスト：『社会学的方法の基準』）

第 11 回国際新音楽休暇コース・講義「シェーンベルクの対位法（実演含む）」

著書：『不協和音』、『認識論のメタクリティーク』

1956/57 冬学期

哲学講義「道德哲学の諸問題」

哲学講義「哲学入門（1 月からホルクハイマーの代講）」

哲学主ゼミ「啓蒙の弁証法（ホルクハイマーと共同）」

社会学主ゼミ「イデオロギーの概念」

1957 夏学期

哲学講義「歴史哲学入門」

哲学主ゼミ「批判哲学の概念をめぐって（ホルクハイマーと共同）」

社会学主ゼミ「現代の諸々のイデオロギー（ホルクハイマーと共同）」

第12回国際新音楽休暇コース・講義「新音楽の諸基準」

著書：『ヘーゲル哲学の諸局面』

1957/58 冬学期

哲学講義「認識論入門」

哲学主ゼミ「アドルノ『認識論のメタクリティーク』（ホルクハイマーと共同）」

社会学主ゼミ「経済と社会1」

1958 夏学期

哲学講義「弁証法入門」

哲学主ゼミ「アドルノ『認識論のメタクリティーク』2（ホルクハイマーと共同）」

社会学主ゼミ「経済と社会2」

著書：『文学ノート1』

1958/59 冬学期

哲学講義「美学」

哲学初級ゼミ「ヘーゲル哲学入門（ホルクハイマーの代講）」

哲学主ゼミ「因果律1（ホルクハイマーと共同）」

社会学主ゼミ「芸術社会学」

1959 夏学期

哲学講義「カント『純粹理性批判』」

哲学主ゼミ「因果律2（ホルクハイマーと共同）」

社会学主ゼミ「社会とは何か？」

著書：『響の型』

1959/60 冬学期

哲学講義「哲学入門」

哲学主ゼミ「ヘーゲルの『論理学』1（ホルクハイマーと共同）」

社会学主ゼミ「権威主義と結びついた性格の研究をめぐって」

1960 夏学期

哲学講義「哲学と社会学」

哲学主ゼミ「ヘーゲルの『論理学』2（ホルクハイマーと共同）」

社会学ゼミ「哲学と社会学との関係をめぐる諸テキスト」

《注》

- (1) ただ、なかには講義一覧に載っていないゼミもあったようだ。たとえば、ホルクハイマー宛ての手紙（1957.11.25）で触れられている初級ゼミなど。「今日の午後には初級ゼミがあって、あなたのこと〔ホルクハイマーの主張〕を考えていました。ヴェーバーは以前と変わらずうまく機能しましたが、かなり時間を費やしました」（AHB 4, S.480）。
- (2) Honneth（2021）は、記録の質の高さに言及しており、その要因について次のように述べている。「時代批評を行なう知識人にして思想家としてのアドルノの名声が、1950年代に瞬く間にフランクフルトを超え出て、共和国全土から最もユニークな若者たちが彼の講座に集まった」（Honneth（2021）S.VII）。
- (3) この論文で取り上げる1957/58冬学期社会学主ゼミ「経済と社会1」の報告者については、第3節などの脚注を参照。
- (4) この点でアドルノのゼミ記録は、たとえばハイデガーの「ツォリコーン・ゼミ」とは決定的に異なる。同ゼミは、ゼミ記録を彼自身が校正し、場合によれば加筆したとのことである（ハイデガー（1991）vii頁）。これについて、編者は「完全な承認を受けた記録」（同）と述べている。記録のなかには、ゼミでの対話をかなり忠実に再現したと思われるものがある（たとえば12-33頁）。アドルノのゼミ記録の場合は、こうした校正などがほぼ存在しないが、むしろそれゆえにゼミの共同性や討議の性質が前面に出ていってよいだろう。
- (5) Demirović（1999）がゼミ記録の性質をどのように捉えているかについては、脚注337を参照（Demirović（1999）S.439, 327-328頁）。FSAはこうした資料上の限界を克服したものである。
- (6) 1950年に哲学の員外教授になっている（Herrschaft und Lichtblau（2010）S.513）。
- (7) 経済・社会科学部における社会学の講座は、当時W. ザルツバッハ（Walter Sulzbach）（1956年以降）、J. クラフト（Julius Kraft）（1957-60）、G. ザロモン＝ドゥラトゥール（Gottfried Salomon-Delatour）（1958-64）、W. リュエッグ（Walter Rüegg）（1961-73）らが担当していた（Herrschaft und Lichtblau（2010）S.513-514）。
- (8) 哲学部での社会学ゼミ開講にともなう手続きに関して、ホルクハイマー宛ての手紙（1957.11.26）を参照。アドルノはこう記している。「重要なのは、声の大きなコーイング〔編注によれば当時の学長 Helmut Coing, S.476〕を満足させる形式性で、それがあれば社会学ゼミの開設がうまくいくのです」（AHB 4, S.480）。
- (9) ちなみに、テシュナー（1928-2019、ゼミ報告者の生没年情報はゲーテ大学フランクフルト・アム・マイン図書館（以下、ゲーテ大学図書館と略称）による）は当時社会研究所の研究員だったとのことだが（Braunstein（2011）S.270）、ホルクハイマー宛ての手紙（1959.2.2）で、アドルノは「〔研究所の当時のプロジェクトとは〕まったく別の事柄で彼と話して、とても思慮深いことに気づきました」と記している（AHB 4, S.556）。編注によれば、テシュナーは1959年に「利益団体の発展」という研究で学位を取得し、1963年から産業社会学と教育社会学の非常勤講師として哲学ゼミを担当した（AHB 4, S.557）。
- (10) AHBの編注によれば、ブランド（1929-87）は1953年からフランクフルト大学で社会学を学び、「軍備と経済：連邦共和国における社会的権力集団と影響集団との統合をめぐる問題への寄与」という研究で学位を取得した（AHB 4, S.557）。ゲーテ大学図書館の情報によれば、1974年から1982年

の間社会研究所の所長を務めた。

- (11) この回の記録者 H. ティラックは、アドルノの複数の講義（『歴史と自由の教説について』、『社会理論の哲学的エレメント』など）とゼミに出席し記録を残しているため、アドルノと一定の信頼関係にあった可能性はあるが、現在のところ詳細は不明である。アドルノは（教育庁の役人から求められていたものの、送り忘れていた）ティラックの所見をホルクハイマーにも送り（1967.1.5）、ホルクハイマーも所見を受け取った旨の返信をしている（1967.1.7）（AHB 4, S.791-793）。
- (12) ここまでの箇所を、先行研究の Demirović (1999) と Braunstein (2011) はいずれも強調して取り上げている（Demirović (1999) S.467, 256-257 頁, Braunstein (2011) S.274-275）。Demirović (1999) は「社会的関係が単純な商品交換からいかなる仕方で生じてくるのかを示すことは、依然としてこれからの課題である。だが『交換原理がこの過程にとって構成的である』ことは認められなければならない」（Demirović (1999) S.468, 257 頁）とアドルノの言説をまとめている。引用箇所の定式化が「依然として曖昧」だとする Demirović (1999) に対して、Braunstein (2022) は、「[交換経済と社会過程という] こうしたエレメントの規定を通じて、アドルノは社会的全体を支配によって規定されるべきものと理解している」（Braunstein (2022) p. 244）と批判している。
- (13) 編注によれば、いずれか不明とのこと（FSA2, S.84）。
- (14) ローレンツ (1934) は FSA に説明がなく、AHB にも言及はない。ただ、ゲーテ大学図書館には、同名の著者による『ポリシェビキ産業政策のはじまり』（1964）や『ソ連の社会史』（1976）という書籍の所蔵情報がある（最終閲覧日：2024 年 7 月 27 日）。
- (15) モール (1928-2021) は FSA に説明がなく、AHB にも言及はない。ただ、ゲーテ大学図書館には、『ある理論の帰結：カール・マルクスの「資本論」をめぐるエッセイ』（1967）などの書籍の所蔵情報がある（最終閲覧日：2024 年 7 月 27 日）。
- (16) 編注によれば、エンゲルスからカウツキーへの手紙（1884.6.26）とのこと（FSA2, S.87）。
- (17) モール「経済と社会：新自由主義の寄与」。
- (18) 編注によれば、K. レンク（Kurt Lenk (1929-2022)）のこと（FSA2, S.82）。レンクは 1956 年に学位取得しているが、ゲーテ大学図書館には、学位論文『精神の無力についてのテーゼ：シェーラーの後期哲学の批判的叙述の試み』が所蔵されている（最終閲覧日：2024 年 8 月 24 日）。レンクはアドルノの社会学主ゼミに 1955 年から 1959 年にかけて頻繁に参加しているが（1955 夏学期「経験的社会調査の認識批判的諸問題」、1956/57 冬学期「イデオロギーの概念」、1957/58 冬学期「経済と社会 1」、1958 夏学期「経済と社会 2」、1958/59 冬学期「芸術社会学」、1959 夏学期「社会とは何か」、最後は 1959.6.23）、この回のゼミにはハーバーマスとレンクの二人が集っていたことになる。
- (19) フェッヒャー「国民経済学の主観主義的価値理論の諸問題」。フェッヒャーは FSA に説明がなく、AHB にも言及はない。ただ、ゲーテ大学図書館には、『公的収入の使途の諸問題』（1962）やマスグレイブ『財政理論』（1969）のドイツ語訳などの所蔵情報がある（最終閲覧日：2024 年 8 月 31 日）。なお、『公的収入の使途の諸問題』には経済・社会科学部での学位論文（1962.2.21）との記載があるため、ゼミ参加時には同学部と何らかの関わりを持っていた可能性がある。かりにそうだとすれば、アドルノのこのゼミにはまさに「2つの社会学」が集っていたことになる。
- (20) また、1957 年の講演「今日の人間的な社会」の影響も考えられる。
- (21) 以下は Bobka und Braunstein (2015) に依拠している。なお、アドルノの講義は、1957/58 冬学期の「認識論入門」以降、その大半が遺稿集に収録されている。

参考文献

※訳文には筆者が断りなく変更を施している箇所がある。

Adorno, Theodor W., (1970-1986) *Gesammelte Schriften*, hrsg. von Rolf Tiedemann unter Mitwirkung von G. Adorno / S. Buck-Morss / K. Schulz, Suhrkamp (= GS, [] 内は成立年)

5 = *Zur Metakritik der Erkenntnistheorie* [1956]

(= 1995, 細見和之・古賀徹訳『認識論のメタクリティーク』法政大学出版局.)

8 = *Soziologische Schriften I*

_____ (1992) "Adornos Seminar vom Sommersemester 1932 über Benjamins Ursprung des deutschen Trauerspiels Protokolle", in: Theodor W. Adorno Archiv (hrsg.) *Frankfurter Adorno Blätter IV*, München: edition text + kritik

_____ (2003) "Gesellschaft: Erste Fassung eines Soziologischen Exkurses", in: R. Tiedemann (hrsg.) *Frankfurter Adorno Blätter VIII*, München: edition text + kritik im Richard Boorberg Verlag

_____ / Max Horkheimer (2004-2006) *Briefwechsel 1927-1969*, hrsg. von Christoph Gödde und Henri Lonitz, Suhrkamp (= AHB, [] 内は執筆年)

Bd. 4 [1950-1969] (2006)

Bobka, Nico und Dirk Braunstein (2015) "Die Lehrveranstaltungen Theodor W. Adornos", IfS Working Paper #8

Braunstein, Dirk (2011) *Adornos Kritik der politischen Ökonomie*, Transcript

_____ (hrsg.) (2021) *Die Frankfurter Seminare Theodor W. Adornos*, De Gruyter (= FSA, [] 内は開講年度)

Bd. 1 [Wintersemester1949/50 - Sommersemester 1957]

Bd. 2 [Wintersemester1957/58 - Wintersemester1960/61]

_____ (2021) "Einleitung des Herausgebers", in: Braunstein (hrsg.), *FSA I*

_____ (2022) *Adorno's Critique of Political Economy*, trans. by Adam Baltner, Brill Academic Publishers.

Demirović, Alex (1999) *Der nonkonformistische Intellektuelle*, Suhrkamp (= 2009-2011, 仲正昌樹責任編集『非体制順応的知識人』御茶の水書房.)

ハイデッガー, メダルト・ボス編, 木村敏・村本詔司共訳 (1991) 『ツォリコーン・ゼミナール』みすず書房

Herrschaft, Felicia und Klaus Lichtblau (2010) "Chronik zur Geschichte der Soziologie in Frankfurt", in: ders. (hrsg.) *Soziologie in Frankfurt*, VS Verlag

Honneth, Axel (2021) "In der Schule der Kritischen Theorie: Die Frankfurter Seminare Theodor W. Adornos", in: Braunstein (hrsg.), *FSA I*

Institut für Sozialforschung (1956) *Soziologische Exkurse*, Europäische Verlagsanstalt (= 1983, 山本鎮雄訳『現代社会学の諸相』恒星社厚生閣.)

表弘一郎 (2024) 「透明化する社会と『抵抗の力』」, 『城西大学大学院研究年報』37

“Economy and Society” in Adorno’s Thought: Analysing his Seminar Protocols in the 1950s

Koichiro OMOTE

Abstract

Recently published Adorno’s seminar protocols which comprise 4 volumes and over 2,000 pages (2021) provide us plentiful and inspiring sources about Adorno’s thought, which could not be seen in his books, lectures, essays and other published materials, and wider perspective on the history of “Frankfurt school” or the genesis of “Critical Theory (Kritische Theorie)” in the post-war Germany.

In this paper, we explore the various interactions between Adorno and seminar participants (mainly students, but including Habermas, Negt, Schmidt, etc) . This study explores Adorno’s seminar protocols recorded in the late 1950s, especially “economy and society” seminar in 1957/58 winter semester. It clarifies Adorno’s thought of the relationship between economy and society, through reports and discussions about Marxian economics, neoliberalism and modern economics. Through the examination of this seminar protocol, we found a fresh and unique thought of the economy, that is, “to survive (überleben)” . Simultaneously, this point of view suggests a critique of the economics and the economy itself. It could provide us another view of the economy, and the possibility of another constitution of society.

However, to understand Adorno’s thought of the economy (and the society) precisely, a successive investigation of 1958 summer semester seminar protocol is needed.

Keywords: Critical Theory, “economy and society”, exchange, critique of neoliberalism, “to survive (überleben)”